



Title	Vol.2 No.4
Author(s)	核兵器廃絶研究センター(RECNA)
Citation	RECNAニューズレター, 2(4), pp.1-4; 2014
Issue Date	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/34331
Right	© 長崎大学核兵器廃絶研究センター

This document is downloaded at: 2019-02-17T00:15:38Z

パグウォッシュ国際会議を長崎へ

調 漸

第61回パグウォッシュ会議の日本開催が決まった。やや耳慣れない方も多いかと思うが、世界的な研究者が一堂に会して、核兵器廃絶、軍縮、平和について議論を深め、科学者からの世界各国への提言を行う伝統ある会議である。

1945年に、広島と長崎に原爆が投下され、太平洋戦争は終戦を迎えたが、東西冷戦の時代を迎え、逆に核兵器開発競争が世界で進行した。

このような事態を憂慮し、1954年のビキニ水爆実験と第五福竜丸乗組員の被爆をきっかけに、哲学者バートランド・ラッセル卿は、平和を希求し核兵器の廃絶を目指す宣言を起草し、物理学者アルバート・アインシュタイン博士に署名を呼びかけた。

アインシュタイン博士は、死の直前にこれに署名し、これを受けてラッセル卿は、1955年にこの宣言を世界に示した。これが「ラッセル・アインシュタイン宣言」と呼ばれているものである。

「ラッセル・アインシュタイン宣言」では、人類生存のために科学者が国際会議を開くことを呼びかけている。翌1955年にノーベル賞科学者達が発表した「ラッセル・アインシュタイン宣言」に感銘を受けたカナダのビジネスマンが、科学者をカナダ東海岸ノバスコシア州の小さな漁村パグウォッシュ村の別荘に招待して実現したものが「パグウォッシュ会議」である。日本からは湯川秀樹博士と朝永振一郎博士、小川岩雄博士の3名の方々が参加されており、以来、毎年1-2回の割合で世界各地で開催され、今日に至っている。

日本では1995年7月に7日間、広島で第45回パグウォッシュ会議が「核兵器のない世界を目指して」というテーマの下に開催され、この会議の直後に、当時のパグウォッシュ会議会長のジョセフ・ロートブラット博士とパグウォッシュ会議がノーベル平和賞を受賞している。

広島と長崎に原爆が投下されて60年目の2005年7月23日から27日までの5日間、広島にて、第55回パグウォッシュ会議が「ヒロシマ・ナガサキから60年」のテーマのもと開催された。5日間にわたって核廃絶と平和に関する活発な討論が行われ、会議最終日に「パグウォッシュ評議会広島宣言」が発表されている。

昨年は、第60回パグウォッシュ会議が11月1日～5日に、トルコ・イスタンブールにて開催された。この会議ではフクシマ原発事故災害についてのセッションが設定され、国際パグウォッシュ評議会の推薦を受けて私が福島における長崎大学の取り組みを中心に紹介し、福島の震災後の健康被害の現状について報告を行った。

この会議は世界の火薬庫と言われた中東の一角のイスタンブールでの開催と言うこともあり、研究者の集いとしての和やかさの中にも普段参加する国際学会と違って、緊張感の漂うものであった。パグウォッシュ会議の発信力に対する期待からと思うが、トルコ国大統領、外務大臣の参加を得て開催され、早朝から夜遅くまで熱の入った議論を続けることになった。



(調理事(写真右)とパグウォッシュ会議評議員の鈴木達治郎氏(写真左))

なかでも印象的だったのは、イランとトルコ、イスラエルとパレスチナ、インドとパキスタン、といった現実の国際政治では対立関係にある国の専門家や政治家が同じテーブルについて意見を交換するパネル討論が続いた事であった。特に、イランとトルコ両国外務大臣が参加したパネルでは、両国が中東における大量破壊兵器を廃絶すべく協力の意思表示をし合う、という画期的な外交成果ももたらした。

このように世界の科学者達が「対立を超えた」対話の場を設け、政府高官を含めた専門家達が非公式な立場で率直な意見交換を行うところにパグウォッシュ会議の伝統を感じたものである。

パグウォッシュ会議は、戦後68年を経た今日も依然としてその重要性を失っておらず、広島と長崎に原爆が投下されて70年の節目の年に「日本での開催を」と言う声を受けて日本開催が決定したのである。

私たちは是非、このパグウォッシュ会議を長崎で開催し、長崎から核兵器廃絶の具体的な提言を世界へ発信したいと願っている。

この想いを具体化するために核兵器廃絶長崎連絡協議会は長崎大学、長崎市、長崎県をはじめとして広く呼びかけてオール長崎体制を構築して開催に向けた努力を開始したいと考えている。

(しらべ すずむ、長崎大学理事)

去る2013年の秋、RECNA客員研究員の四條知恵と高山真がコーディネイタとなり「長崎原爆はいかに語りうるか」をテーマとする連続研究会を開催した。報告者はNHK文化センター講師の井上俊治氏(10月29日)、四條(11月26日)、高山(同27日)である。

この3日間、原爆の「語り」を軸にメディア、歴史、記憶の問題に関し活発な議論が展開した。個々の報告に向けた質疑は、核兵器廃絶に携わる研究者から、被爆者調査に携わる研究者への問いかけであり、双方の対話は、本稿に与えられた「被爆体験の継承と核兵器廃絶」という大きなテーマにアプローチする。

長年にわたりNHK番組制作を担う井上氏は、旧日本軍の捕虜として長崎で被爆した人びとを対象とするドキュメンタリー制作について報告した。戦時中の長崎にオランダ兵士が捕虜として収容された事実を知る者は少ない。この映像には、知られざる過去が孕むインパクト、番組制作者である井上氏とオランダに在在する被爆者の心理的な交流が内包されており、観る者の心に揺さぶりをかける。私たちは、オランダ兵として長崎で被災した被爆者の心理あるいは立場をいかに理解しうるかと問いかける映像である。

井上氏とオランダに生きる被爆者の交流は、ドキュメンタリー制作の実践がインタビューの営みを核とすることも示唆する。二重、三重の植民地性に媒介された過去を表象する営みは、文書資料の調査と同時に、オーラル・ヒストリーの実践と共有するところが多い。井上氏の報告に対し、オランダの被爆者へアプローチする資料の在在について、また、日本のアジア侵略に伴う被爆者に関する歴史認識と捕虜の被爆者にたいする認識の差異に関する質問があった。

博士論文にもとづく四條報告は、井上氏の報告が焦点化する原爆被害のトランスナショナルな位相と対照的に、丹念な資料発掘と聞き取りに根ざし、ローカルな浦上の語りにも注目する。「なぜ占領期の浦上の原爆の語りにおいて、永井隆の燐祭(はんさい)説をめぐる語りが支配的なのか」を問題意識として、歴史の物語論の方法、広島との比較で「浦上」を考察する有用性を検討し、永井隆の生涯と燐祭説の先行研究をレビューする。

永井の思想の影響力が大きく、浦上のカトリック教徒の語りにも焦点があたらないこと、その思想の受容状況が検討されていないことをふま

え、四條が目指すのは「ひび」という言葉である。極限状況の利己的な行動にたいする不審や負い目から、隣人との間に入った「ひび」を浦上のカトリック集団に入った「ひび」と捉え、「旧市街の人びとの発言」を視野に「原子爆弾は天罰」の語りに注目する。これらの語りの検討を浦上の復興の問題と関連させ、浦上の語りを集団のなかの個人がアイデンティティを再形成する力として考察する方向性を提示する。四條報告にたいし、先行する被爆者調査との関係、原爆投下国の原爆観と浦上の語りの関係、また、資料の扱いに関する質問が寄せられた。

博士論文にもとづく高山報告は、井上氏が指摘する加害性の問題と、四條氏が指摘するローカルな語りの問題を内包する「継承」をめぐる被爆者の語りを検討した。具体的には、語りえない体験の表象と、語りえない体験の継承を基本的なテーマとし、2005年から継続する長崎被爆者とのライフストーリー・インタビュー調査の報告である。「語り部」として生きる人びとの語りにも生じる継承観の差異に注目し、言説の権力(爆心地からの距離、平和教育の受容の程度)と個々の語りの関係を検討し、この現実から生みだされる「被爆者になる」という語りにも継承の可能性をみいだす。

高山報告に対し、生活経験に根ざした「被爆者」との出会いに関するコメント、被爆を「体験した者」と「体験していない者」の認識に関する質問が寄せられる。前者のコメントは、報告者の調査経験と軌道と同じくするものであり、後者の質問は、実証主義と構築主義の認識の差異に起因する。高山報告は、「体験した者／していない者」という認識の枠組み自体を問いなおす構築主義を基本的な立場とする。被爆者が体験の語りえなさを前提に構築主義的に自己を語ることで、自明視された実証的な被爆者カテゴリーに揺さぶりがかかる。このカテゴリーの裂け目に「被爆者になる」可能性が秘められている。

連続研究会につづく第16回RECNA研究会では、全炳徳先生のご紹介により、シカゴのデュポール大学の宮本ゆき先生をお迎えし「核時代における核の語りと神話の解体」をテーマに、ここに紹介した問題を宮本先生のご専門である倫理学の視点から再検討する機会に恵まれた。

(たかやま まこと、RECNA客員研究員)

報告:核兵器の非人道性に関する「ナヤリット会議」に参加して

ナヤリット会議

中村 桂子

1967年2月14日、「ラテンアメリカ及びカリブ地域における核兵器禁止条約」が締結され、人間の居住地域における初めての非核兵器地帯が誕生した。核使用の瀬戸際まで行ったキューバ危機を背景に、地域からの核兵器の完全排除を目指したこうした努力は、まさに「核兵器のない世界」の実現に向けた非核兵器国主導の包括的なアプローチに道を拓くものであったといえよう。そこから47年経った今年2月13～14日、メキシコ・ナヤリットで開催された核兵器の非人道性をテーマにした同国政府主催の国際会議は、そのような包括的なアプローチを求める声が国際社会に広がっているという実感とともに、日本をはじめ、核兵器に依存し続ける非核兵器国の責任の重さをあらためて強く印象付けるものであった。

会議の正式名称は、「第2回核兵器の人的影響に関する会議」である。核兵器使用の影響に関する科学的・客観的な事実情報の国際共有を目的として、昨年3月にノルウェー政府が主催した国際会議のフォローアップとして位置付けられた。会議には146の政府代表(核兵器保有国のうち、5核兵器国、イスラエル、北朝鮮が不参加)の他、国連、国際赤十字委員会などの国際組織、多くの市民社会からの出席があった。RECNAはアカデミア枠としてメキシコ政府の招待を受け、筆者が参加した。

ナヤリット会議を総括する上で、議論の全体的な流れに影響を与えたとと思われる要素を2つ挙げたい。まず、NGOらの働きかけの成果として、会議冒頭に1時間45分の「被爆者の証言」セッションがもたれた

ことが一つである。長崎被爆者でメキシコ在住の山下泰昭さんら5名がそれぞれの体験や思いを語り、非人道性の議論の原点としての広島・長崎の惨禍を参加者に思い起こさせた。

加えて重要な要素は、会議初日の朝、オーストリア政府が第3回会議を<今年後半>に同国で開催するとの発表を行ったことである。これにより、とりわけ最後の意見交換セッションにおいて、各国政府代表は「次に来たるべきは何か」を見据えた議論を行うことが可能となった。この点については再度触れたい。

4つのワーキングセッションでは、朝長万左男・長崎原爆病院院長(RECNA客員教授)ら専門家が壇上に立ち、核兵器爆発が公衆衛生、人道支援、経済、環境、気候変動、食糧安全保障等に及ぼす地球規模かつ長期的な結末をめぐっての多角的な議論が交わされた。とりわけ、オスロ会議では触れられなかった新しい観点として、「偶発的な核使用のリスク」がクローズアップされたことに注目したい。パネリストからは核使用前まで行った事件・事故のケースが紹介され、指揮統制システムの脆弱性、人為的ミス、高い警戒態勢、核テロ等を原因とした核兵器使用の危険性が高まっていることが指摘された。RECNAの「世界の核弾頭データ」ポスターにも使用されている『持っている限りは使われる』というキャッチコピーが、単なるスローガンではなく、科学的データに裏付けされた事実であることを私たちはあらためて認識する必要があるのではないだろうか。

メキシコとオーストリアの両国が共同で議長を務めた意見交換セッションでは、予定時間を大幅に超えて各国政府の発言が相次いだ。その多くが非人道性を根拠として核兵器禁止に向かう必要性を訴えるものであったが、一方で日豪やNATO加盟国などの核兵器依存国からは「安全保障の現実を踏まえるべき」との従来通りの消極姿勢が示された。

最後にメキシコのロブレド外務次官が、「議長概要」(RECNA「市民データベースに全訳」)を発表した。「概要」は、他の兵器と同様、まず非合法化され、続いて廃棄されるというプロセスが「核兵器のない世界を達成する道」であるとし、現在の核兵器の非人道性に関する議論が「法的拘束力のある条約締結を通じて、新たな国際基準及び規範を実現すること」に繋がっていくべき、との見解を示した。そして、「特定の時間枠」「最適な議論の場の定義」「明確かつ実質的な枠組み」に関する検討作業を含めた、「この目的に資するような外交プロセス」を開始する時期が来た、と訴えた。

議長概要はあくまで拘束力を持たない「私的なまとめ」であるが、いずれにしても今年年内に開かれる次回会議において核兵器禁止に向けた実質議論の進展を求めるメキシコ政府の並々ならぬ意志が示

された、と言ってよいだろう。一方、日本政府は、「我が国として如何なる対応をとるべきか検討する必要がある」(会議の総括を述べた外務省のHP)と現時点では参加の可否を含め、態度を明確にしていない。非人道性の議論をめぐっては、まもなく広島で開催される「軍縮・不拡散イニシアティブ(NPDI)」外相会合、ニューヨークでのNPT再検討会議第3回準備委員会、広島・長崎原爆忌、国連総会第一委員会と、2015年NPT再検討会議に向けた国際気運を左右する重要な局面が続く。今後の動きを注視していきたい。

(なかむら けいこ、RECNA准教授)

※RECNAでは今年もNPT再検討会議準備委員会(4月28日～5月9日、ニューヨーク国連本部)にスタッフを派遣し、連日の会議動向・分析を伝える「NPTブログ」を発信します。RECNAホームページ(<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>)にアクセスしてください。

「ナガサキ・ユース代表団」二期生に選ばれて

ナガサキ・ユース代表団

山中智絵(長崎大学薬学部1年)

ナガサキ・ユース代表団第2期生8名はニューヨークの国連本部で開催される2015年NPT再検討会議第3回準備委員会に参加します。

12月に参加メンバーが決定してから定期的にミーティングや勉強会を行い、準備を重ねてきました。RECNAに関わりのある外務省やNGOの方々を講師に迎えての勉強会だけでなく、1期生が築いたネットワークにより核兵器問題に取り組むスイスの学生との交流も実現することができました。ニューヨークでは本会議への参加に加えて、ドイツから参加する学生とのディスカッションの場を設け、準備委員会終了後も続くつながりを持ちたいと考えています。

私は将来保健医療分野でグローバルに活動したいと考えています。RECNAでの学びを通して、核兵器の使用が食糧安全保障や公衆衛生、環境に与える影響について特に関心を持ったので、ニューヨーク出発までにより深く掘り下げて考えたいと思います。また、来年は広島と長崎に核兵器が投下されて70年という節目であるのと同時に、2015年NPT再検討会議が開催される年でもあります。このことを念頭において今年の準備委員会の動向を実際に見て学び、継続的に核問題に関わっていこうと思います。

ナガサキ・ユース代表団として活動を始めてから、核兵器問題を切り口に自身の学習意欲が日々喚起されるのを実感しています。私を含め代表団のメンバーは、実際に国際会議の場に参加することで

兵器を他人事ではなくより身近な問題として捉えることができるようになっていきたいと思います。この恵まれたニューヨークでの学びを、長崎の若者を始め多くの人に発信し共有することで、核兵器問題と向き合う人の輪を少しでも広げていきたいです。

最後になりましたが、私たち8名に素晴らしい学びの機会をくださる核兵器廃絶長崎連絡協議会及びRECNAの先生方を始め、すべての方に感謝の意を申し上げます。



(長崎平和公園の被ばくモニュメント前でユース研修会、2014年3月20日)

「核兵器のない世界を目指して」：第一クールの感想

モジュールを終えて

広瀬 訓

昨年度から開講されてきた長崎大学の教養教育の一環である全学モジュール(科目群)の「核兵器のない世界を目指して」の初めての履修学生が、三学期(一年半)にわたるカリキュラムを完了した。このモジュールでは、一年次に「国際社会と平和」、「核兵器とは何か」および「被ばくと社会」の基礎的な三科目を全員が履修し、二年次には、「核廃絶と教育」、「被ばく者と医療」、「市民運動・NGOと核兵器廃絶」、「核軍縮の法と政治」、「文学・芸術と核兵器」の五科目の中から、三科目以上、合計で六科目以上履修することになっている。昨年開講されたこのモジュールを選択した「一期生」は、教育学部や経済学部の学生を中心に、50名ほどであり、ほとんどの学生が無事履修を終えた。

このモジュールの内容は、その科目名からもわかるように、「核兵器廃絶」というテーマに関し、さまざまな角度からアプローチしようとするものである。講義では、私の他に、梅林教授、三根教授、全教授、中村准教授と、RECNAのスタッフが総がかりで取り組んだだけでなく、被ばく者の方を含め、原爆資料館スタッフ、ジャーナリスト、医学者、現役の外交官、平和運動家、映画プロデューサーなど、大学の内外から多数の方々に講師を依頼し、協力をいただいた。「核兵器廃絶」という一つのテーマに対し、これだけ多角的に多くの学生が取り組むようなプログラムは、世界的に見ても例がないはずであり、長崎大学ならではの試みである。

履修した学生からの評判もまざまざであり、授業の内容に対する評価も比較的高く、担当者としてはとりあえずほっとしているというのが本音である。授業に対する学生の反応については、大学として取り組んでいる授業評価アンケートの他に、私を含めて各教員が適宜個別に学生の意見を聞く機会を設けているが、それとは別に学生が主体となって実施している各授業に関するアンケートもあった。その結果を見せてもらったが、非常に興味深いものであった。「核兵器のない世界を目指して」を履修した学生の、このモジュールに対する評価が、文字通り真二つに割れたのである。「全学モジュール科目に満足していますか」という質問に対し、「とても満足している」「どちらかと言えば満足している」「どちらかと言えば満足していない」「全く満足していない」と答えた学生がそれぞれほぼ1/4ずつで、「分からない」と答えた学生が、ゼロだったのである。通常このようなアンケートを行った場合、「分からない」や「どちらとも言えない」という、中間の回答が多なりがちで、今回も他の科目ではやはりその傾向が見られた。それに

もかわらず「核兵器のない世界を目指して」を履修した学生は、誰一人としてその中間的な選択肢を選ぶことなく、この授業の内容に対し、賛成か反対か、自分の立場を明らかにしたのである。これは私にとって、若干の驚きと大きな喜びであった。「不満」の内容は、主に「第一志望ではなかった」や「専門外の勉強はしたくなかった」という、科目の内容よりも履修制度の問題を指摘するものと、「課題や発表の負担が重い」というものだった。履修制度の問題は科目担当者が解決できるものではないので措くとして、課題についても、「適当」という学生のコメントもあり、やはり「賛否両論」のようである。もちろん我々としては、すべての学生に満足して欲しいとは願っているが、少なくとも「どちらでも良い」という、無関心な学生を生み出さなかったことは大きな成果であると考えている。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

RECNAの活動

2014年1月1日～2014年3月31日

- 1月7日(火) ■韓国出張、ワークショップへの協力依頼
～1月9日(木) (広瀬副センター長、全教授)
- 1月14日(火) ■ナガサキ・ユース代表団第2期生披露目記者会見
(調理事、中村准教授)
- 1月18日(土) ■平成25年度 第5回核兵器廃絶市民講座
「核軍縮と開発問題」
講師:広瀬副センター長
- 1月20日(木) ■岸田外務大臣との懇談会(調理事、梅林センター長)
岸田外務大臣講演会「外務大臣と語る～核軍縮・不拡散～」
- 2月9日(日) ■メキシコにて「第2回核兵器の非人道性に関する国際
～2月17日(月) 会議」に出席(中村准教授)
- 2月15日(水) ■第5期生平和案内人育成講座(梅林センター長)
- 2月19日(水) ■第17回RECNA研究会
「米口の核兵器の現状と近代化計画」
- 講師:RECNA兼務教員 富塚明准教授
(水産・環境科学総合研究科)
- 2月24日(月) ■ワシントンDCで開催のPNND国際大会及び
～3月3日(月) 北東アジア非核地帯ラウンドテーブルに出席
(梅林センター長)
- 2月25日(火) ■NBC主催の会でメディア向けに講演(中村准教授)
- 3月12日(水) ■第4回RECNA運営委員会
- 3月14日(金) ■第18回RECNA研究会
「ラッセル・アインシュタイン宣言をふりかえる」
講師:サンディ・ブッチャー
(パグウォッシュ会議国際事務局)
- 3月15日(土) ■平成25年度 第6回核兵器廃絶市民講座
「核兵器の非人道性をめぐる世界の動向」
講師:中村准教授
- 3月26日(水) ■広島大学広島平和研究所にて「平和・安全保障事
～3月27日(木) 典」編集委員会に出席(広瀬副センター長)
- 3月28日(金) ■原爆資料館にて運営委員会に出席(広瀬副センター長)

お知らせ

- 4月19日(土) **平成26年度 第1回核兵器廃絶市民講座**
「核兵器の非人道性」メキシコ会議の報告
- 講師:朝長万左男RECNA客員教授
 - 4月29日(火) **NPT再検討準備委員会の進展をブログ発信**
～5月9日(金) <http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/nptblog/>
 - 6月14日(土) **平成26年度 第2回核兵器廃絶市民講座**
「NPT再検討会議第3回準備委員会から見てきたこと」
- 講師:中村桂子准教授
- ※いずれも開催場所、時間は以下の通り。
- ・ 場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
交流ラウンジ
 - ・ 時間:13:30～15:30
事前申込不要/ 受講料無料

RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

第2巻4号 2014年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail. recna@ml.nagasaki-u.ac.jp
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 インテックス

©2014 長崎大学核兵器廃絶研究センター